

## 茶入

左京区 田中 誠孝

茶入(ちゃいれ)とは抹茶を入れておく陶製の容器のことで、象牙の蓋をして仕覆という着物が着せてある。その起源は建仁寺を開山した明菴栄西禅師が宋から帰ったときに梅尾高山寺の明恵高弁上人に茶の種を贈るのに用いた漢柿蒂(あやのかきべた)の茶壺が始まりとされ、大陸で香辛料や種を入れておく小壺として使用されていた。従って茶入は本来の使用目的から転用され、茶道具として使われたものである。

茶は薬用として渡ってきたものであり大変に貴重に扱われたようである。当時は「団茶：だんちゃ」といい、「茶の葉を蒸し、臼でついて団子にしたものを削って、ほかの香味食品と



漢柿形茶壺

ともに煮出した汁を飲む」ことが主流であったらしい。その後、高山寺や宇治で茶の栽培がはじまり、茶の粉末を湯の中に入れてかきまぜる抹茶法が普及しはじめる。それにもなつて貴重な抹茶を入れる容器の造りが盛んになり権力者や高僧の間に抹茶を飲む習慣が広まっていった。

戦国時代から江戸初期までの茶入に対する価値観は一國一城に匹敵する程のものを持っており、唐物の「初花肩衝」、「檜柴肩衝」、「新田肩衝」と呼ばれる茶入は名物茶入として名高い。「初花肩衝」は中国の南宋または元時代の作と推定され、「くれないのはつ花ぞめの色ふかく思ひしころ われわすれめや(よみびと)しらず…古今集723」から足利義政によって初花と付けられた。重要文化財指定名称は、「唐物肩衝茶入 銘初花」である。

これほどまでに茶入に価値を付けたのは一体誰であったのか。堺の武器商人としても活躍した茶道の宗匠である千利休や今井宗久、津田宗及の名が挙がるが、戦功を立てた武将に与える領地が少なくなっていたことも一因として考えられ、政治的な意図を持って織田信長が茶器の価値を高めた(御茶湯御政道)との説もある。手に載るような容器でありながら陶器のすべての観賞面をもっており、当時は貴重な抹茶を入れる魅力的な容器として武将の間

でもはやされ、これらのことが一國一城を凌駕するような価値の所以であったろうと考えられる。甲斐攻略で戦功のあった滝川一益は信長に「珠光小茄子」の茶入を所望するつもりでいたが、与えられたのは関東管領の称号と上野一國、信濃の一部の加増で落胆したという逸話がある。茶入には仕覆を着せ挽家(ひきや)茶器を保存する為の容器の総称、木の挽物で出来ている)に入れてさらに挽家袋を被せ、さらに箱に入れて仕舞われたことをみても非常に大切に扱われたことがわかる。「九十九髪茄子…つくもなす」(付藻髪茄子)という茶入がある。戦国時代



付藻髪茄子

随一の名物と言われ、その名は村田珠光(わび茶の開祖)・南方録(熊倉功夫訳)には「四畳半座敷は珠光の作事也」とある)が九十九貫で買ひ、伊勢物語の「百年(もととせ)に一とせ足らぬ九十九髪 我を恋ふらし 佛(おもかけ)にみゆ」に由来している。足利義満、義政の手から村田珠光、織田信長、豊臣秀吉と渡り大阪夏の陣で火災にあうも徳川家康の命により藤重藤殿(ふじしげとうげん)の漆芸によって復元される。X線画像ではいくつにも割れた様子が見ら

れるという。灰の中から割れた破片を集めるが口の部分はどうしても発見することができず、仕方なく別の陶磁器の口を代わりに利用したようである。その後所有者が変わり、越前一乗谷の朝倉太郎左衛門が入手したときは五百貫、越前府中の呉服商小袖屋の手に渡ったときには、一千貫の値が付いたという。明治になって三菱財閥の岩崎弥之助の所有となり静嘉堂文庫美術館に所蔵されている。表面を覆う部分は、ほぼすべて漆による修復であるという。茄子と言えはいわゆる茄子形の細長いものを思い浮かべるが、当時の駿河の茄子は丸い「折戸ナス」が主流で徳川家康が好んで食したらしい、その形態は「九十九髪茄子」の形に似ている。折戸ナスは静岡県清水区三保・折戸地区で生産され將軍家に献上されていた。初代紀州藩主が紀州に持ち込み、さらにこの折戸茄子を下鴨神社に献上したものが賀茂茄子となったと言われる。「秋なすび、早酒(わささ)の粕につまませて、よめ(夜目)・ネズミ)にはくれじ、棚におくとも」(夫木和歌抄)鎌倉時代から茄子は格別なもののようなものである。



折戸ナス